



Title	<研究ノート>『カンタベリー物語』にみられる否定辞neについて
Author(s)	加藤, 正治
Citation	大阪大学英米研究. 2012, 36, p. 33-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99356
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『カンタベリー物語』にみられる 否定辞 ne について —— 研究ノート ——

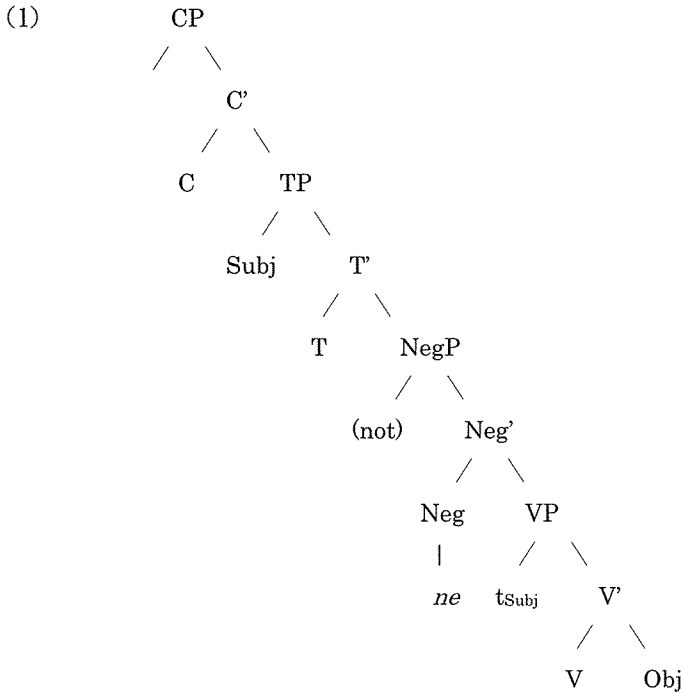
加藤 正治

1.

本稿の目的は、生成文法の枠組みで中英語（Middle English）期にみられる否定辞 ne がどのように扱われるかを検討することである。データは手始めに中英語期の代表的な作品である『カンタベリー物語』から得られたものを用いる。^{*}*Oxford English Dictionary*（以下 *OED*）によれば否定辞 ne は副詞及び接続詞として分類されている。生成文法の枠組みによる否定文の分析においては、ne は NegP の主要部 Neg の位置に基底生成される否定の接語（clitic）とみなされている。この接語としての分類は *OED* にみられる副詞及び接続詞という分類とどのように関係するのであろうか。ある一定の関係があるのか、それとも全く関係ないのか、本稿ではそのあたりを探ってゆくことにする。

2.

生成文法の考え方によれば否定文には NegP が存在し、それは文構造の間あたりに置かれている。その位置は言語によって微妙に異なるようであるが、英語に関しては次の図のように VP の上に置かれるのが普通である。



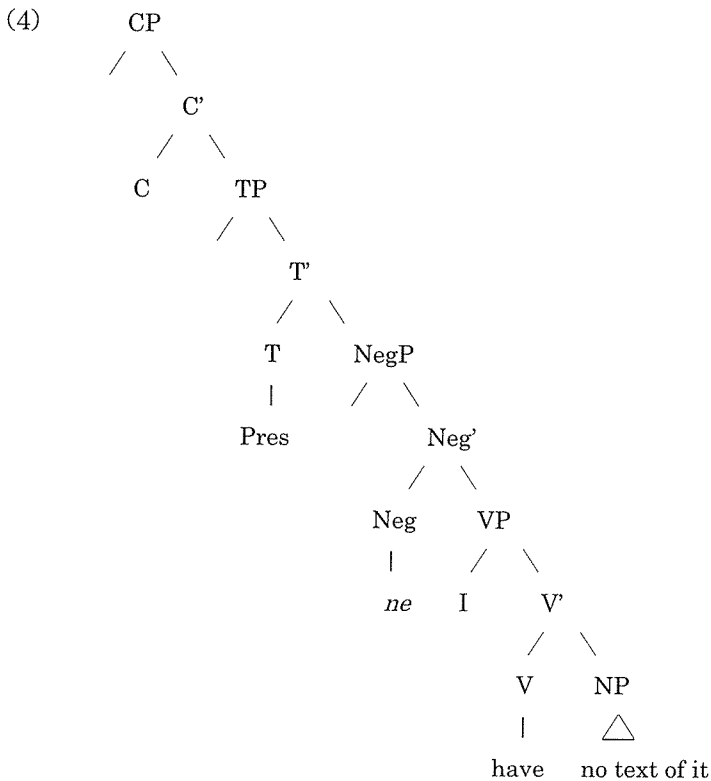
最近の極小主義（Minimalist Program）の考え方では扱いが異なるが、従来の考え方では否定辞 *ne* は接語とみなされ *Neg* の位置に基底生成される。中英語の否定文に典型的にみられる *ne V not* の構文の *not* は *NegP* の指定辞位置に基底生成される。当時の英語においては現代英語とは違って動詞が *T* 位置まで繰り上げられたのでその途中で接語 *ne* を編入することになり、*T* に至る前に *not* を超えてゆく。その結果として *ne V not* の構文が生成されることになる。

中英語期には否定辞 *ne* が *not* 以外の否定語と共起する累積否定は極めて普通であるとされている。

- (2) I ne have no text of it, (The Summoner's Tale 1919)

(3) And yet ne wan I nothyng in this day. (The Friar's Tale 1477)

これらの累積否定は意味的に否定であるので、Gelderen 2010 では Negative Concord (否定の呼応) と呼ばれており、一方の否定語がもう一方の否定の意味を打ち消す場合 (Double Negation (二重否定)) と区別されている。(2) の基底構造の関係する部分だけを示せば以下ようになる。

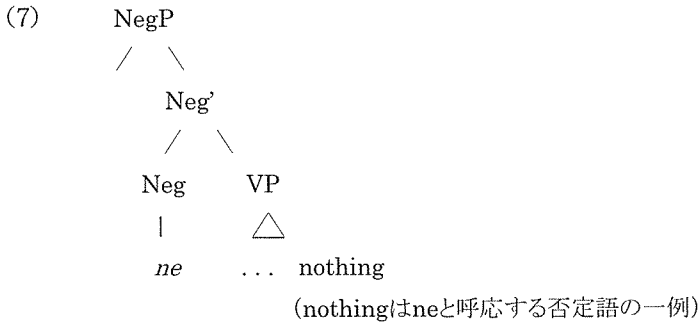


次のように、否定語が主語になっている場合については、VP 内主語仮説を想定すれば基底構造において否定語が *ne* より下に来る。いずれにしても否

定の呼応の場合の否定語は基底構造では *ne* よりも下の位置に, すなわち *ne* によって C 統御 (c-command) される位置に置かれることになる。そういう意味で, どちらも Gelderen 2010 において示されている否定の呼応の形式 (7) に合致していると言える。

(5) No man ne myghte hym bere to ne fro. (The Monk's Tale 2625)

(6) That noon of us ne speke nat a word, (The Miller's Tale 3586)



3.

否定辞 *ne* が文頭に現れる可能性がある場合としては次の二つのタイプが考えられる。

(8) タイプ A

Ne + *V* / *Aux* + *Subj* + ...

(9) タイプ B

Ne + *XP* + ...

タイプ A は *ne* を編入した動詞もしくは助動詞が C 位置に移動したと考えられる文である。この移動は動詞第二位構文を形成する時に典型的にみられ

るものであるが、この場合には、話題要素が CP 指定辞の位置へ移動していない点が特徴的である。否定辞 *ne* を接語とみなす限りは *ne* を第一要素とみなすことはできない。したがってこれは動詞／助動詞で始まる倒置文ということになる。あるいは不完全な動詞第二位構文といえるかもしれない。調査の結果、明らかにこのタイプであると断定できる例は見つからず、それらしい可能性のある例が一例見つかっただけである。

- (10) for I shal to Surrye, Ne shal I nevere seen yow moore with eye.
(The Man of Law's Tale 274)

この *ne* を接語ではなく副詞とみなすことも可能であろう。そう考えればこの例は否定倒置 (negative inversion) の典型的な例ということになる。中英語期の他の作品に以下のような例が見られる。

- (11) The lond is ful of other gode. Nis ther flei, fle, no lowse in cloth,
in toune, bed, no house. (*Land Cokayne* 36) [OED より]
(12) Thai graunted that Tristrem wald, Other no durst ther nan; Nis
ther non so bald Ymade of flesche no ban, No knight.
(*Sir Tristrem* 997) [OED より]

該当箇所はいずれも *nis* で始まる *there* 構文で、*ne* と *is* が結合されて *nis* になっている点が特徴的である。この結合は *ne* の接語としての性質を示すものとしてみなされるのが通常であると思われる。(10) もこれと同じパターンであると考え、*ne* が副詞である可能性はかなり低いと言わざるを得ない。すなわち最初に仮定したように、*ne* を編入した動詞／助動詞が C 位置へ移動したものとみなすのが妥当である可能性がかなり高いということになる。

タイプ B については注意が必要で、中尾 (1972) によれば XP が不定名詞句である場合には *ne* + XP が構成素を成すと考えられている。したがって、こ

ここでは XP が不定名詞句でない例を扱うことにする。基本的に ne は XP 要素と構成素を成さないなのでこの ne はタイプ A の接語の ne とは異なるものである。恐らくは副詞か接続詞ということになると思われるが、副詞であれば XP カテゴリー、接続詞であれば X^0 カテゴリーになる。副詞であるとすれば次にみられるように否定倒置を示すはずであるので、その可能性はないと判断される。

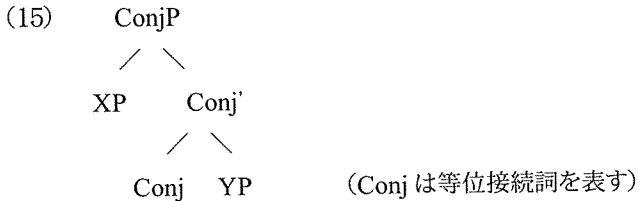
(13) No lenger might he in this wise endure, . . .

(The Merchant's Tale 1878)

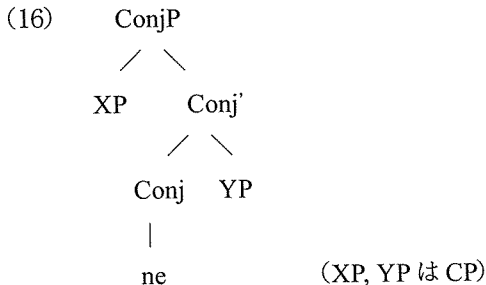
(14) . . . , namoore may it lyve withouten temporeel goodes.

(The Tale of Melibee 1554)

したがって、この ne は接続詞とみなされるが、その場合には構造が問題になる。一般に等位接続構造は次のような構造を持つとされている。



Conj の位置に X^0 カテゴリーである ne が入ると (16) のようになる。



タイプ B は接続詞が文頭に置かれているので、(16) において XP が併合されず、YP のみが併合されたものとみなすことができる。あるいは、ゼロの XP が併合されていると考えることもできるかもしれない。具体例は以下のとおりである。

- (17) I nam no labbe; Ne, though I seye, I nam nat lief to gabbe.

(The Miller's Tale 401)

- (18) For certes, resoun wol nat that any Man sholde bigynne a thyng,
but if he myghte Parfourne it as hym oghte; ne no wight sholde
Take upon hym so hevy a charge that he Myghte nat bere it.

(The Tale of Melibee 1213)

- (19) But al thyng which that shineth as the gold Nis nat gold, as that I
have herd it told; Ne every appul that is fair at eye Ne is nat good,
what so men clappe or crye. (The Canon's Yeoman's Tale 962)

- (20) For soothly ther is nothyng that savoureth so wel to a child as the
milk of his Norice, ne nothyng is to hym moore abhomnyable than
thilke milk whan it is medled with Oother mete.

(The Parson's Tale 122)

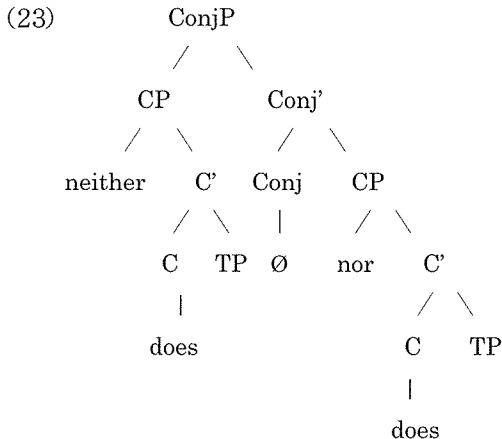
- (21) For, as Witnesseth seint mathew, capitulo quinto, A citee may nat
been hyd that is set on a Montayne, ne men lighte nat a lanterne
and Put it under a busshel, but men sette it on a Candle-stikke to
yeve light to the men in the Hous. (The Parson's Tale 1037)

これらの例では *ne* の前の文は否定文になっているので、文文法の枠を超えて考えると構造上は二つの否定文が接続詞 *ne* によって等位接続されているとみなすことができる。したがって、意味的には現代英語の *neither* XP nor YP と同じく相関的な表現になっていると考えることができる。しかし、現代英語において *neither* と *nor* で二つの文を接続した場合とは構造上は異

なっていると思われる。次の Den Dikken 2006 からの例にみられるように、*neither* と *nor* で二つの文を接続した場合には倒置構文になるからである。

- (22) a. Mary *neither* spends her vacations at the seashore *nor does she* go to the mountains.
 b. ?*Neither does Mary* spend her vacations at the seashore *nor does she* go to the mountains.
 c. **Neither* Mary spends her vacations at the seashore *nor* she goes to the mountains.

否定倒置構文は動詞第二位構文であるので先頭の *neither* および *nor* は副詞で CP の指定辞位置にあり、助動詞が C 位置にあることになる。したがって、詳しい構造についての議論はここではできないが、(22b) は概略次のような構造になっていると考えられる。



否定辞 *nor* が *Conj* の位置ではなく CP の指定辞位置にあると仮定すると、等位構造を仮定する限り必然的にゼロ接続詞を仮定しなければならない。こ

のゼロ接続詞については妥当性に関して議論が必要であるが、ここではこれ以上立ち入らないことにする。

上記の (16) において *ne* は CP を選択しているので、*ne* の後に動詞第二位構文が現れることが予想される。具体例を調べてみると、次の例にみられるように予想通り *ne* の後ろに動詞第二位構文が生じている。

- (24) Nere myn extorcioun, I myghte nat lyven, Ne of swiche japes wol
I nat be shryven. (The Friar's Tale 1439)

- (25) for he dide nevere synne, ne nevere cam ther a vileyns word out of
his mouth. (The Tale of Melibee 1503)

- (26) This sampson nevere ciser drank ne wyn, Ne on his heed cam
rasour noon ne sheere, By precept of the messenger divyn, For alle
his strengthes in his heeres weere. And fully twenty wynter, yeer
by yeere, He hadde of israel the governaunce.

(The Monk's Tale 2055)

- (27) Thise preestes, as seith the book, Ne konne nat the myserie of
preesthod to the peple, ne God ne knowe they nat.

(The Parson's Tale 901)

次の例は、*ne* で始まる点はこれまでの例と同じであるが、前文が肯定文になっている点が特徴的である。

- (28) For which this noble duc as he wel kan, Conforteth and honoureth
every man, And made revel al the longe nyght Unto the straunge
lordes, as was right. Ne ther was holden no disconfitynge But as a
justes or a tourneyng, For soothly ther was no disconfiture.

(The Knight's Tale 1857)

- (29) This olde Sowdanesse, cursed krone, Hath with hir freendes doon
this cursed dede, For she herself wolde all the contree lede. Ne
ther was Surryen noon that was converted, That of the conseil of
the Sowdan woot, That he nas al tohewe er he asterted.

(The Man of Law's Tale 432)

- (30) And if that she be foul, thou seist that she Coveiteth every man
that she may se, For as a spaynel she wol on hym lepe, Til that she
fynde som man hire to chepe. Ne noon so grey goos gooth ther in
the lake As, seistow, wol been withoute make.

(The Wife of Bath's Prologue 265)

- (31) Ye han erred also, for ye han maked no division bitwixe youre
conseillours; this is to Seyn, bitwixen youre trewe freendes and
Youre feyned conseillours; ne ye han Nat knowe the wil of youre
trewe Freendes olde and wise; (The Tale of Melibee 1255)

- (32) For senec seith that -- the wise man that Dredeth harmes, eschueth
harmes, ne He ne falleth into perils that perils eschueth.

(The Tale of Melibee 1319)

これらの例では相関的な意味は出てこないが、構造上は(16)と同じ構造を持っていると考えてよい。そのことは、次の例にみられるように ne の後に動詞第二位構文が生じていることから分かる。

- (33) And the same seneca also seith: I am born to Gretter thynges that
to be thral to my body, Or than for to maken of my body a thral.
Ne a fouler thral may no man ne womman Maken of his body that

for to yeven his body To synne. (The Parson's Tale 145)

以上まとめると、タイプ A は例の数が少ないが、生成文法で想定されている接語の *ne* の例であり、*ne* と結合した動詞が（おそらくは動詞第二位構文を形成するために）文頭に移動されたものと考えられる。タイプ B は従来通り接続詞としての *ne* が文頭にあるもので、*ne* は CP を選択していると考えられる。

4.

否定辞 *ne* の他の用法として、否定表現と相関的に用いられるものがある。この場合、「*ne* ~ *ne* ~」のように *ne* が繰り返されるものもあれば、「他の否定表現 ~ *ne* ~」となっているものもある。前節の事例との重複を避けるために、ここではつながれている要素が節、即ち CP である場合を除外して考察する。前節でも述べたように、現代英語ではこのような相関的表現の代表的なものとして *neither* ~ *nor* ~ や *either* ~ *or* ~ が考えられる。この構造を派生する方法については、移動を用いるもの (Larson 1985)、削除を用いるもの (Schwarz 1999)、右枝節点繰り上げ (Right Node Raising) を用いるもの (Han & Romero 2004)、焦点化不変化詞 (focus particle) として分析するもの (Hendriks 2003、Johannessen 2005) などがあるが、本稿では Schwarz 1999 の削除分析を取り上げて考察する。Schwarz 1999 によれば次の (34) の各文は (35) にあるような削除を経て生成されると提案されている。

(34) a. John either ate rice or beans.

b. Either John ate rice or beans.

(35) a. John either [_{VP} ate rice] or [_{VP} ate rice]

b. Either [_{TP} John ate rice] or [_{TP} John ate beans]

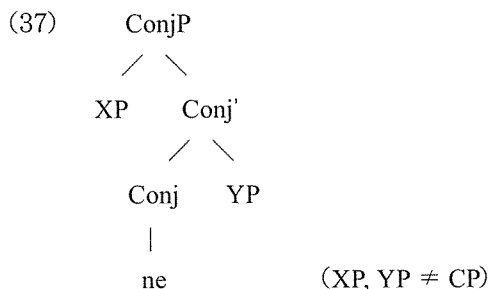
この考え方に従えば、*neither* ~ *nor* ~ も同様に扱われると考えられるが、その場合① *either* / *neither* の生じる位置と② *or* / *nor* の生じる位置が問題と

なる。前節の(22)で述べたように、否定倒置との関係から neither と nor はともに CP 指定辞の位置にあると仮定したので、(35b)の either と or についても同様に考えられよう。本節で扱っている CP 以外のものがつながれている場合にもこの考え方を敷衍すれば、(35a) や次の (36) において either / neither および or / nor は VP 指定辞の位置にあることになる。VP 指定辞の位置は典型的に VP 内主語の併合される位置であるし、さらに極小主義の枠組みでは主語以外の要素もそこへ移動されてくるので、either / neither および or / nor をそのような位置に置くことは複雑な問題を孕んでいることになるが、そのあたりの考察は別の機会に譲ることにする。

(36) They were neither advised to learn Spanish nor German.

[Hendriks 2004]

他方、否定辞 ne については、前節で述べたとおり、二つの CP をつなぐ場合は現代英語の nor とは違って接続詞であると仮定した。この考え方を敷衍すれば CP 以外のものがつながれている場合も同様に考えられ、(16)と同じ単純な等位構造をもつということになる。



以上を想定して、最初に「ne ~ ne ~」のように ne が繰り返されるタイプ、次に「他の否定表現 ~ ne ~」のタイプについて検討する。

「ne～ne～」のタイプについては、最初の ne が動詞と結合している接語である場合とそうではない場合とに分けられる。前者の例として次のものが見つかった。

- (38) Looke what day that endelong britayne Ye remoeve alle the
rokkes, stoon by stoon, That they ne lette ship ne boot to goon, --

(The Franklin's Tale 992)

- (39) Allas! I ne have no langage to telle Th' effectes ne the tormentz of
myn helle;

(The Knight's Tale 2227)

接語の ne が動詞と結合する前の段階で、先の削除分析に従えば (38) の派生は (40) のようになろう。

- (40) That they ne [_{VP} lette ship] ne [_{VP} lette boot] to goon,

後者の例としては次のものがある。

- (41) No neer atthenes wolde he go ne ride, Ne take his ese fully half a
day,

(The Knight's Tale 968)

- (42) But, upon peyne his heed of for to swappe, That no man sholde
knowe of his entente, Ne whenne he cam, ne whider that he wente;

(The Clerk's Tale 586)

基本的にこのタイプは二つ（以上）の対等の要素を ne でつないでいるように、削除分析の対象となる例は見つからなかった。現代英語の neither ～ nor ～や either ～ or ～と同じく、最初の ne の品詞が何かということと位置がどこなのかということが問題になる。文の構造においてどこに等位接続が生じているかを示す、すなわちどのカテゴリーが等位接続されているのかを示すマーカールであるように思われるが、そのなると Hendriks 2004 で言う

れているように焦点化不変化詞としての副詞であると考えるのがよいと思われる。生じる場所としては、等位接続であるということを厳密に解釈すれば ConjP に付加しているとみなすのが一番無難であるように思われるが、否定の及ぶ作用域などの観点からみて問題のある可能性がある。

「他の否定表現～ *ne* ～」のタイプについては、数多くあるので一部だけを掲載する。

(43) I nevere heeld me lady ne mistresse, But humble servant to youre
worthynesse, And evere shal, whil that my lyf may dure, Aboven
every worldly creature. (The Clerk's Tale 823)

(44) He neither pleyeth at the dees ne daunceth,
(The Shipman's Tale 304)

(45) But ther is bettre lif in oother place, That nevere shal be lost, ne
drede thee noght, Which goddes sone us tolde thurgh his grace.
(The Second Nun's Tale 323)

(46) Men dreme of thyng that nevere was ne shal.
(The Nun's Priest's Tale 3094)

(47) And weneth that he be at hoom in chepe, He is in spaigne, right at
the toune of lepe, -- Nat at the rochele, ne at burdeux toun;
(The Pardoner's Tale 569)

この中で (43) は表面上対等でない要素がつながれているので削除分析が可能である。

(48) I nevere [_{VP} heeld me lady] *ne* [_{VP} heeld me mistresse],

その他の例では対等の要素がつながれているので単純な等位構造であると考えられる。ただし、*neither* と *nat* については、先の「*ne* ～ *ne* ～」の場合と

同様にそれらの品詞と位置が問題になるかもしれない。また、ここに挙げていない例においては他の様々な否定語が用いられている。それらの否定語についても同様の問題が生じるであろうと思われる。

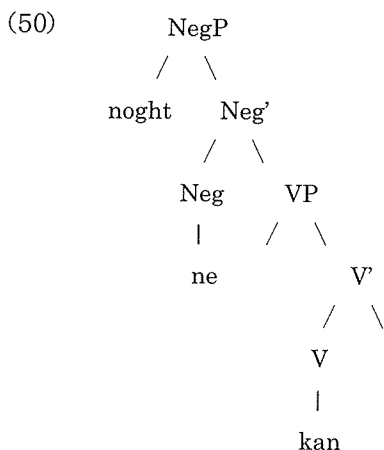
5.

本節では、考察の過程見つかった問題となりそうな例を検討する。

- (49) And swiche thynges as he noght ne kan, he Shal nat been ashamed
to lerne hem, and enquere of lasse folk than hymself.

(The Tale of Melibee 1072)

この例においては、先にみたように *ne* は接語で動詞 *kan* がそれを編入して T 位置に繰り上がっているとすると *noght* の位置が問題になる。(1) の構造を仮定する限り *noght* は T' に付加していると考えざるを得ない。現代英語において主語と動詞の間に副詞が現れることは普通にみられるが、それは現代英語では動詞が T 位置に繰り上がることがなく元位置にとどまっており、副詞は VP に付加していると考えられるからである。中英語の *ne* と *noght* の位置関係は次のようになっていると考えられる。



現代英語のように動詞 *kan* がこのまま移動をしなければ (49) の語順が出てくるが、中英語では動詞が T 位置まで繰り上がるとみるのが一般的なのでこの考えは採れない。やはり T' に付加しているとしか考えられないが、そもそもそのような付加が可能であるのか否かが問題である。

- (51) for certes gold ne silver ben nat So muche worth as the goode wyl
of a Trewe freend. (The Tale of Melibee 1160)

この例は *OED* において「*ne ~ ne ~*」の最初の *ne* が省略されているものとして扱われているものである。下線部は主語であるので最初は VP 内にあったはずである。否定辞 *nat* が NegP 内にあり、動詞 *ben* が T 位置まで繰り上がっているとすると、概略次のような構造が想定できる。

- (52) ___ ben nat [_{VP} [_{gold}] *ne* [_{silver}] *t*_{ben} So much worth ...

これは前節でみた「否定表現 *~ ne ~*」の形式であるので、「*ne ~ ne ~*」の最初の *ne* が省略されたとみなす必要はないかもしれない。

- (53) But robyn may nat wite of this, thy knave, Ne eek thy mayde gille
I may nat save; (The Miller's Tale 3555)

- (54) Nat ther as it is wasted and devoured, Ne ther it nedeth nat for to
be yive, (The Summoner's Tale 1721)

これらの例は二つの否定文が接続詞 *ne* によってつながれている例と考えられるが、*ne* の後に続く *thy mayde gille*、および *ther* が問題である。そのあとにそれぞれ *I may nat save*、*it nedeth nat* と続いているので、この *thy mayde gille* および *ther* は現代英語風に文頭に置かれた話題のように見える。当時の英語は一応動詞第二位構造を保持しており、その場合の先頭位置に置

かれるのが話題であるとする、たとえば (53) では I may ではなく may I のように倒置になるはずである。事実、倒置になっている例が (24)～(27) においてみられた。念のために他の写本をいくつか調べてみたがいずれも倒置になっていない。韻文であるということで許される特別な語順なのか、現代英語の話題化構文の萌芽が見え始めていたのか不明である。

- (55) And therfore he, of ful avysement, Nolde nevere write in none of his sermons Of swiche unkynde abhomynacions, Ne I wol noon reherce, if that I may.

(The Introduction to the Man of Law's Tale 86)

この例は「ne + 動詞 + (not 以外の) 否定の副詞」のパターンで、否定の副詞は V' に付加していると考えられる。

- (56) For on my porthors here I make an ooth That nevere in my lyf, for lief ne looth, Ne shal I of no conseil yow biwreye.

(The Shipman's Tale 131)

この例では、ne は接語で shal に編入されており特に問題はないが、that 節内で nevere in my lyf を節頭において否定倒置、すなわち動詞第二位構造が形成されている点が問題である。現代英語でも稀に補文内で否定倒置が観察されることはあるので、(56) は恐らくそれと同じ扱いができるのではないかと思われる。いずれにしても ne とは直接関係のない次元の話になるであろう。

- (57) He yaf nat of that text a pulled hen, That seith that hunters ben nat hooly men, Ne that a monk, whan he is recchelees, Is likned til a fissh that is waterlees, -- (The General Prologue 177)

- (58) For certes, in this world ther is no Wight that may be conseilled ne

kept sufficeantly Withouten the kepyng of oure lord jhesu Crist
(The Tale of Melibee 1300)

これらはいずれも「否定表現～ ne ～」の形式であり、表面上は対等でない要素が ne でつながれているので、次のような削除分析が可能であると思われる。

- (59) a. He yaf nat [of that text a pulled hen, That seith that hunters
ben nat hooly men], Ne [~~of that text a pulled hen, that seith~~
that a monk, whan he is recchelees, Is likned til a fissh that is
waterlees],
b. ther is no Wight [~~that may be conseilled~~] ne [that may be kept
sufficeantly] Withouten the kepyng of oure lord jhesu Crist.

一応このように考えられるが、構造上、否定表現 nat および no wight と ne との距離があまりにもかけ離れているという印象が強い。このような削除が許容されるのか否かが問題になる可能性がある。さらに次の例のように否定語で修飾された名詞句が ne でつながれている場合には一見すると「否定表現～ ne ～」の形式のように見える。

- (60) Thee lakketh noon array ne no vitaille;
(The Shipman's Tale 304)

しかしこれには先頭の「否定表現」にあたるものが欠けている。

- (61) [DP/NP noon array] ne [DP/NP non vitaille]

一つのアイディアとしては、空の NegP の主要部の Neg を利用し、VP が二つつながっているとみなすことである。

(61) Neg [vp lakketh noon array] ne [vp lakketh no vitaille]

このように考えれば一応他の「否定表現～ ne～」の形式と同列に扱うことができる。

6.

以上、『カンタベリー物語』にみられる否定辞 ne について考察してきたが、まとめると次のようになる。

- (63) ①動詞と結合していると考えられる ne は生成文法で想定されているように接語であるとみなすと従来副詞の ne といわれてきたものは大幅に減少する。
- ②文頭に現れる ne は①の場合および主語に直接関係している場合を除けばすべて従来通り接続詞である。
- ③否定語と相関的に用いられる ne はすべて接続詞である。
- ④副詞としての ne は「ne～ne～」の相関表現の最初の ne だけである。

これらから分かることは、接続詞としての ne と副詞の ne が存在することは従来と同じであるが、分布の仕方が大いに異なっている、ということである。接続詞としての ne は従来とほぼ同じ扱いになると思われるが、①にあるように副詞としての ne は大幅に減少し④にあるように相関表現の「ne～ne～」の場合だけである。従来の考え方では単純に「副詞」とされてきたものが詳しく見ると接語と副詞に分けられ、そのほうが実態をよりよく反映しているということを示すことができたと思われる。本稿全体としては予備的研究としての色合いが強いので詰めが甘いところばかりである。調査範囲を広げ議論を深めることが今後の課題である。

*データ収集に際してはインターネット上の *Corpus of Middle English Prose and Verse* に収録されている F.N.Robinson 編 第二版 (Boston, 1957) を利用した。

参考文献

- Den Dikken, Marcel 2006. "Either-Float and the Syntax of Co-Ordination" *Natural Language & Linguistic Theory* 24:689-749.
- Gelderen, Elly van 2004. *Grammaticalization as Economy*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gelderen, Elly van 2008. "Negative Cycles" *Linguistic Typology* 12:195-243.
- Gelderen, Elly van 2009. "Feature Economy in the Linguistic Theory" *Historical Syntax and Linguistic Theory* ed. by Paola Crisma & Giuseppe Longobardi, 93-109. Oxford: Oxford University Press.
- Gelderen, Elly van 2010. "Negative Concord and the Negative Cycle in the History of English" *Language Change and Variation from Old English to Late Modern English: A Festschrift for Minoji Akimoto* ed. by Merja Kytö, John Schill, & Harumi Tanabe New York: Peter Lang
- Han, Chung-Hye, and Maribel Romero 2004. "The Syntax of *whether* / *Q* . . . or Questions: Ellipsis Combined with Movement" *Natural Language & Linguistic Theory* 22:527-564.
- Hendriks, Petra 2003. "'Either' as a Focus Particle" Manuscript. University of Groningen.
- Hendriks, Petra 2004. "Either, Both, and Neither in Coordinate Structures" *The Composition of Meaning: From Lexeme to Discourse*. by Werner Abraham Amsterdam: John Benjamins.
- Johannessen, Janne Bondi 2005. "The Syntax of Correlative Adverbs" *Lingua* 115:419-443.
- Larson, Richard K. 1985. "On the Syntax of Disjunction Scope" *Natural Language & Linguistic Theory* 3:217-264.

加藤 正治

中尾俊夫 1972.『英語史Ⅱ』 東京：大修館書店.

根之木朋貴 2006.「再投射分析ふたび — *either-or* 構文のロバ文を巡って —」

『甲南英文学』 21:54-78.

Schwarz, Bernhard 1999. "On the Syntax of *Either . . . Or*" *Natural Language & Linguistic Theory* 17:339-370.